
ボブ・ディランのノーベル文学賞受賞についての ニューヨーク・タイムズの記事をめぐる考察

花木 亨

要 旨

この論文では、ボブ・ディランのノーベル文学賞受賞に対して、ニューヨーク・タイムズがどのように反応したのかを分析する。2016年10月13日、スウェーデン・アカデミーはアメリカ合衆国のミュージシャン、ボブ・ディランにノーベル文学賞を授与すると発表した。ミュージシャンがノーベル文学賞を受賞するのは初めてのことであり、この出来事はメディアの注目を集めた。ディランが生まれ育ち、その活動拠点としてきたアメリカ合衆国のメディアは、このディランによるノーベル文学賞受賞の知らせに対して、どのように反応したのだろうか。アメリカ合衆国のメディアは、ディランによるノーベル文学賞受賞にどのような意味を付与し、どのようなボブ・ディラン像を描き出したのだろうか。この論文では、これらの問いに対する一つの応答を試みる。特に、アメリカ合衆国を代表する新聞であり、若き日のディランが活動拠点としたニューヨークの新聞でもあるニューヨーク・タイムズの記事に注目する。

1. はじめに

2016年10月13日、スウェーデン・アカデミーはアメリカ合衆国のミュージシャン、ボブ・ディラン（Bob Dylan）にノーベル文学賞を授与すると発表した。ミュージシャンがノーベル文学賞を受賞するのは初めてのことであり、この出来事はメディアの注目を集めた。日本の主要新聞各紙もこのニュー

スを大きく取り上げた(岡部, 2016年10月13日; 小滝, 2016年10月13日; 広瀬, 2016年10月13日; 「ボブ・ディランさんにノーベル文学賞」, 2016年10月13日)。

日本の新聞は、ディランによるノーベル文学賞受賞の事実、授賞の理由、音楽表現が文学賞の対象とされたことの特異性、授賞式の日程、賞金額などについて伝えた上で、ディランのことを必ずしも知らない現代日本の読者のために、ディランの経歴を紹介した。これらの記述は、ディランがノーベル文学賞を受賞したという事実とその意味、またボブ・ディランという多面的なミュージシャンの一面を現代日本の読者向けにわかりやすく伝えている。こうしたメディアの活動は、現代日本というコミュニケーション空間において、ディランによるノーベル文学賞受賞という出来事をめぐる一つの解釈を提示している。

それでは、アメリカ合衆国ではどうだろうか。ディランが生まれ育ち、その活動拠点としてきたアメリカ合衆国のメディアは、ディランによるノーベル文学賞受賞の知らせに対して、どのように反応したのだろうか。アメリカ合衆国のメディアは、ディランによるノーベル文学賞受賞にどのような意味を付与し、どのようなボブ・ディラン像を描き出したのだろうか。この論文では、これらの問いに対する一つの応答を試みる。特に、アメリカ合衆国を代表する新聞であり、若き日のディランが活動拠点としたニューヨークの新聞でもあるニューヨーク・タイムズの記事に注目する。

2. 研究の意義

この研究には、以下の三つの意義がある。まず、ボブ・ディランという人物の文化的重要性がこの研究に意義を与えている。ディランは1962年のレコードデビュー以来、半世紀以上にわたって、ミュージシャンとそれ以外の人びとに大きな影響を与えてきた。その影響力の一端を示す事実として、ディ

ランはグラミー賞、ゴールデングローブ賞、アカデミー賞を受賞するとともに、ロックの殿堂（Rock and Roll Hall of Fame）への殿堂入りを果たしている（Dansby, 2001, March 26; Golden Globe Awards, n.d.; Grammy.com, 2018; Rock & Roll Hall of Fame, n.d.）。また、2008年には「類まれな詩の力を持つ作詞活動に象徴されるポピュラー音楽とアメリカ文化への測り知れない影響（For his profound impact on popular music and American culture, marked by lyrical compositions of extraordinary poetic power）」によってピューリッツァー賞特別賞を受賞し、2012年には大統領自由勲章（Presidential Medal of Freedom）を受章している（Rolling Stone, 2012, May 29; The 2008 Pulitzer Prize Winner, 2018）。そして、2016年、ディランはノーベル文学賞を受賞した。これらの賞の妥当性や正当性については議論の余地があるだろうし、ディラン自身もこれらの賞を望んで受け取ったということではないかもしれない。しかし、それを差し引いても、これらの客観的事実はディランの文化的影響力の一端を示していると言える。

次に、ノーベル賞に対する社会的関心の高さがこの研究に意義を与えている。アルフレッド・ノーベルの遺言によって1901年から授与されているノーベル賞は、特定分野において優れた功績を遺した人物に贈られる世界的な賞として注目されてきた（ノーベル賞の記録編集委員会, 2017）。現在においてはノーベル賞の存在や選考方法に対する批判も多く、その権威を自明視することはできない。しかし、肯定的なものであれ、否定的なものであれ、ノーベル賞が世間の注目を集めていることに変わりはない。メディアは受賞者が決まる前から、その年の受賞者が誰かを予想し、受賞者が決まった後には、それについて大きく報道する。これは文学賞においても変わらない。1953年に政治家のウィンストン・チャーチルが受賞して以降、ノーベル文学賞は伝統的な意味での文学の領域で活動する者たちに贈られてきたが、2015年にジャーナリストのスヴェトラナ・アレクシエーヴィッチがこれを受賞した。この受賞は、スウェーデン・アカデミーが考える文学の定義に変化が生

じていることを示す出来事として話題を呼んだ。主にポピュラー音楽の領域で活躍するディランによる2016年の受賞は、その変化をさらに推し進めるものとして賛否両論を巻き起こした。このような話題性のある賞の受賞について、メディアがどのように反応したのかを検討する意義は大きい。

最後に、ニューヨーク・タイムズというメディアの社会的重要性がこの研究に意義を与えている。ニューヨーク・タイムズは、アメリカ合衆国でもっとも影響力の大きい新聞の一つだとされる。このことは、良質のジャーナリズムに与えられるピューリッツアー賞をニューヨーク・タイムズが122回受賞しているという事実にも表れている (Pulitzer Prizes, 2018)。これは報道機関の中で最多の受賞回数である。紙媒体と電子媒体の新聞が混在している現在において、その発行部数を正確に把握することは難しいが、ニューヨーク・タイムズの発行部数が全米で最大級であることは間違いない (2016 Annual Report, 2017)。他の賞と同様、ピューリッツアー賞の権威について批判的に検討することはできるし、発行部数の多さがその新聞の質の高さを示しているとも言い切れない。その一方で、これらの事実は、ニューヨーク・タイムズが現在のアメリカ社会において無視することのできないマスメディアであることを示している。したがって、ニューヨーク・タイムズがディランのノーベル文学賞受賞にどのように反応したのかを吟味することには一定の価値があると考えられる。これに加えて、若き日のディランがミュージシャンとしての基礎を築いたのがニューヨークだったという事実も、ニューヨーク・タイムズの記事に注目するもう一つの理由となるだろう。

3. 研究の立場

メディアを題材とした他の多くのコミュニケーション研究と同様に、この研究は社会的現実がコミュニケーションによって創られるという考え方に立っている (Berger & Luckmann, 1967; Gergen, 2015; Leeds-Hurwitz, 2009)。ディ

ランによるノーベル文学賞受賞という出来事は一つだとしても、この出来事をめぐる解釈は無数にある。そして、その解釈の数だけ、社会的現実があると考えることができる。この研究では、特にニューヨーク・タイムズというマスメディアに注目し、この新聞がディランによるノーベル文学賞受賞という出来事をどのように描き出したのか、またこの出来事にどのような意味を与えたのかを吟味する。

4. ニューヨーク・タイムズが伝えたディランのノーベル文学賞受賞

ニューヨーク・タイムズに掲載されたディランのノーベル文学賞受賞についての記事は多いが、ここでは特に受賞のニュースが最初に伝えられた2016年10月13日頃に掲載された記事の中から特徴的なものを選んで、その内容を吟味していく。

4-1. 一般的な報道記事

Sisario, Alter, Chan による記事は、ディランのノーベル文学賞受賞について、一般的に伝えたものと言える (Sisario, Alter, & Chan, 2016, October 13)。記事は、ノーベル文学賞がミュージシャンに与えられるのが初めてであるという事実を確認した上で、これは1901年に始まったノーベル文学賞の歴史の中でもっとも「ラディカル (radical)」な選択かもしれないと述べている (Sisario, Alter, & Chan, 2016, October 13)。そして、ミュージシャンに文学界最高の栄誉を与えることによって、スウェーデン・アカデミーは文学の境界線を引き直そうとしており、そのことが歌詞に詩や小説と同等の芸術的価値があるかどうかをめぐる論争を巻き起こしていると伝えている (Sisario, Alter, & Chan, 2016, October 13)。

Sisario, Alter, Chan によれば、作家のサルマン・ラシュディはディランを「吟遊詩人の伝統の優れた継承者」と評し、今回の受賞を称えたという (2016,

October 13)。また、詩人のビリー・コリンズは、ディランの歌詞について、「ハーモニカとギターと彼特有の声がなかったとしても興味深く」、詩として十分に通用すると述べたという。記事は、ミュージシャンが文学賞を受賞することを疑問視する作家たちがいることをあわせて伝えてはいるものの、どちらかと言えば、ディランの受賞を支持するような事実をより多く紹介している (Sisario, Alter, & Chan, 2016, October 13)。

文学の境界線を引き直すということについて、Sisario, Alter, Chan は、今回のディランの受賞がハイカルチャーとロウカルチャーの間の溝を埋めるものだとし唆している。伝統的な意味での純文学をハイカルチャーに属するものとし、ディランの作品のようなポピュラー音楽をロウカルチャーに属するものとする二項対立的な捉え方は、時代の流れとともに説得力を失いつつある (Barker & Jane, 2016)。記事は、音楽評論家の言葉を引用しつつ、今回のディランによるノーベル文学賞受賞がその流れを後押しするものだとししている (Sisario, Alter, & Chan, 2016, October 13)。

この境界線の引き直しは、文学と定義される表現活動の範囲をこれまでになく広げる行為のように見えるが、必ずしもそうとは限らない。記事によれば、文学研究者でスウェーデン・アカデミーの選考委員であるサラ・ダニウスは、ホメロスやサッフォーのような古代ギリシャの詩人たちが口語で作品を表現したことを引き合いに出し、ディランがその口承文学の伝統を継承していると示唆した。その意味において、今回のディランによるノーベル文学賞受賞は、狭く限定される傾向にあった文学の範囲を古代ギリシャ時代にそうであった範囲にまで広げ直す試みと捉えられるだろう (Sisario, Alter, & Chan, 2016, October 13)。

Sisario, Alter, Chan は、ディランの経歴についてもかなり詳細に紹介している。1941年、ミネソタ州ダルース (Duluth) に生まれたディランは、ウディー・ガスリーの伝統を継承するフォーク・シンガーとして、マンハッタン南部グリニッジ・ヴィレッジのクラブやカフェで活動を始めた。独特の歌

詞と楽曲によって他のアーティストや批評家たちの注目を集めたディランは、数年の間にその音楽をより洗練させると同時に、ロックへと接近していった。1965年のニューポート・フォーク・フェスティバルでは、ロックバンドを伴って演奏し、一部のファンから商業主義への身売りだとして非難された。1966年のオートバイ事故後は、しばらく世間の目を避けながら音楽活動を続けた。

1975年発表のアルバム *Blood on the Tracks* で人間関係が崩壊していく様子を緻密に描写し、その4年後に発表された *Slow Train Coming* ではキリスト教を主題としたことで賛否両論を巻き起こした。最近の作品では、かつてフランク・シナトラなどが歌った流行歌を自己流に解釈している。またディランは、1988年以降、通称「ネヴァー・エンディング・ツアー」と呼ばれるコンサートツアーを絶え間なく続けている (Sisario, Alter, & Chan, 2016, October 13)。

このようにディランの略歴を記したのち、Sisario, Alter, Chan は、1960年代におけるディランの作風の変化について、Giles Harvey の文章を紹介する。Harvey によれば、ディランは当時のフォーク界に蔓延していた「教条主義的な左派政治 (doctrinaire leftist politics)」に嫌気がさし、より空想的でナンセンスな歌詞を書くようになったという。そこでは、伝統的なフォークが描く「粗く、下品で、無法な (rough, ribald, lawless)」世界観が、歴史、文学、伝説、聖書などの登場人物たちとぶつかり合うと Harvey は述べる (Sisario, Alter, & Chan, 2016, October 13)。

最後に Sisario, Alter, Chan は、ディランの影響力の大きさを確認して記事を締めくくる。そこでは、ディランが現代の音楽に与えた影響が深遠であること、またディランについて多くの文献が生み出され続けていることが記される。さらにディランが、グラミー賞、アカデミー賞、ゴールデングローブ賞、ピューリッシャー賞特別賞、大統領自由勲章を受け取ると同時に、ロックの殿堂への殿堂入りを果たしていることも紹介される。

Sisario, Alter, Chan による記事は、ディランのノーベル文学賞受賞につい

ての一般的な情報を読者に与えることを目指したものだと言える (Sisario, Alter, & Chan, 2016, October 13)。記事は、ディランによるノーベル文学賞受賞の事実を伝えると同時に、これが文学の境界線を引き直す出来事であるという解釈を提示している。また、ディランの経歴をかなり詳しく紹介すると同時に、その影響力の大きさを確認している。日本の新聞に掲載された同様の記事と似た内容ではあるが、ここではより踏み込んだ記述が試みられていると言えるだろう。

4-2. 社説

2016年10月13日付の社説は、ディランによるノーベル文学賞受賞を肯定的に受け止めている。まず冒頭において社説は、ディランによるノーベル文学賞受賞のニュースが当時争われていた大統領選以外に何か考えるべきこと、議論すべきことを人びとに与えたとして、これを「ありがたい安らぎ (a blessed relief)」と表現する (The Editorial Board, 2016, October 13)。それと同時に社説は、このニュースがニューヨーカーたちにとって特別な意味を持つことを強調する。ディランはニューヨークで自分の芸術的才能を开花させ、独自の音楽世界を創造した。その意味において、ディランはニューヨークの息子であり、ニューヨークが生んだノーベル賞受賞者のようなものだと社説は書く (The Editorial Board, 2016, October 13)。

続いて社説は、ニューヨークという場所がディランというミュージシャンを生み出す上で果たした役割を強調する。社説によれば、ミネソタから移住したばかりの若き日のディランは、ニューヨークのグリニッジ・ヴィレッジで演奏の機会を得ることで、メディアの注目を集めた。ニューヨーク・タイムズの音楽評論家 Robert Shelton による 1961 年の記事は、ディランの活動を軌道に乗せる上で重要だった。また、ディランが敬愛するウディー・ガスリーを訪ねた先は、ニューヨーク郊外のクイーンズだった。当時、多くのフォーク・ミュージシャンたちを惹きつけたニューヨーク・シティーの自由でリベ

ラルな雰囲気、ディランの芸術性と創造性を刺激したのだろうと社説は推測する（The Editorial Board, 2016, October 13）。

社説によれば、ノーベル文学賞選考委員会が高く評価したのは、多種多様なものを吸収し、自分の作品の中に取り込むディランの能力である。それを裏付けるべく、社説は先に述べた Robert Shelton の言葉を紹介する。Shelton は、ディランがフォーク・ソングを極めて独特な仕方で解釈していること、またその手法が絶え間なく進化していることに感銘を受け、ディランは「周囲からの影響をスポンジのように吸収し続けている」と書いたという（The Editorial Board, 2016, October 13）。

Shelton の言葉どおり、その後のディランの音楽活動は広く、遠くにまで及んだと社説は記す。ディランはフォークの枠に留まることなく、ブルース、ゴスペル、ヒルビリー、ロックンロールなどに接近し、それらの音楽から深い影響を受けると同時に、それらの音楽に独自の影響を与えた。社説は、フォークやブルースなどの音楽にどっぷりと浸ることが「ディランの作曲活動を可能かつ不可避にしている（made his songwriting possible, even inevitable）」と述べた上で、以下のディランの言葉を引用する（The Editorial Board, 2016, October 13）。

You just do it subliminally and unconsciously, because that's all enough, and that's all you know. That was all that was dear to me. They were the only kinds of songs that made sense. (Bob Dylan, quoted in The Editorial Board, 2016, October 13)

最後に社説は、半世紀に及ぶ音楽活動の中でディランが生み出してきた楽曲の数々を再び称えながら、その記述を終えている。

ニューヨーク・タイムズの社説がディランによるノーベル文学賞受賞を肯定的に受け止めていることは、驚くにはあたらないだろう。ニューヨークはディランと縁の深い場所であるし、ニューヨークやニューヨーク・タイムズのリベラルな気風とディランの作風には通じるところがある。その一方で、

先ほど吟味した Sisario, Alter, Chan による記事や、これから吟味するいくつかの記事と比べて、社説の記述がやや簡素な印象を与えるのも事実である。アメリカ合衆国においては、すでにディランについて多くが語られており、また今回の受賞については他の記事がより踏み込んだ記述を提供していることから、社説がそこにあえて言葉を足す必要はなかったということかもしれない。

4-3. 批評記事

文学批評家 Dwight Garner による記事と音楽批評家 Jon Pareles による記事は、一般的な記事や社説よりも、直接的に、力強く、ディランのノーベル文学賞受賞を支持している。まず文学批評家 Dwight Garner は、今回のスウェーデン・アカデミーの選択が他の文学者たちを推していた多くの人びとを困惑させたであろうことを認めた上で、自分自身はその選択を以下のように支持する。

This Nobel acknowledges what we've long sensed to be true: that Mr. Dylan is among the most authentic voices America has produced, a maker of images as audacious and resonant as anything in Walt Whitman or Emily Dickinson. (Garner, 2016, October 13)

ここで Garner は、ディランをアメリカ合衆国が生み出した中で最高水準の「本物の声 (authentic voice)」を持つ者であるとしつつ、その文学的想像力をウォルト・ウィットマンやエミリー・ディキンソンといった不動の名声を誇る詩人たちのそれに匹敵すると述べている (Garner, 2016, October 13)。

その一方で Garner は、ディランの歌詞が紙の上に文字として書かれた詩とは違うことに注目する。1965年のディランの楽曲「Desolation Row」の歌詞を「生焼けかもしれない (possibly half-baked)」と評したイギリスの詩人 Philip Larkin の言葉を引用しつつ、Garner はディランの言葉が紙の上でそのように見える可能性があることを認める (Garner, 2016, October 13)。その上

で Garner は、ディランの言葉が音として発せられたときに放つ魅力について以下のように書く。

But Mr. Dylan's work — “with its iambics, its clackety-clack rhymes, and its scattergun images,” as the critic Robert Christgau wrote — has its own kind of emblematic verbal genius. His diction, focus and tone are those of a caustically gifted word man; his metrical dexterity is everywhere apparent. He is capable of rhetorical organization; more often he scatters his rhetoric like seed, or like curses. (Garner, 2016, October 13)

種を撒き散らすように、あるいは呪いを撒き散らすように発せられるディランの言葉は、文字として読まれるよりも音として聴かれたときに強い力を放つ。そう述べる Garner は、ディランと同時代に生きる幸運に感謝しながら記事を締めくくっている。

音楽批評家 Jon Pareles は、ディランのノーベル文学賞受賞について、「なぜこんなにも時間がかかったのか (what took them so long?)」と問いかけながら、記事を始める (Pareles, 2016, October 13)。Pareles によれば、ディランは本格的な創作活動を始めた 1960 年代から言葉と音楽を重んじる人びとに高く評価されてきた。それは、ディランの作風を表す「Dylanesque」という形容詞がかなり早い時期から使われてきたという事実によっても示されている (Pareles, 2016, October 13)。「ディラン風 (Dylanesque)」としか表現することができないようなディラン特有の創作活動について、Pareles は以下のように書く。

But there's no question that Mr. Dylan has created a great American songbook of his own: an e pluribus unum of high-flown and down-home, narrative and imagistic, erudite and earthy, romantic and cutting, devout and iconoclastic, finger-pointing and oracular, personal and universal, compassionate and pitiless. His example has taught writers of all sorts — not merely poets and novelists — about strategies of both pinpoint clarity and anyone's-guess free association, of telegraphic brevity and ambiguous, kaleidoscopic moods. (Pareles, 2016, October 13)

この Pareles の言葉は、ディランの作品が内包する両義性をうまく捉えている。ディランの作品は、「学術的であると同時に素朴、ロマンティックであると同時に痛烈、敬虔であると同時に因習打破的、批判的であると同時に預言的、個人的であると同時に普遍的、情け深いと同時に無慈悲」であると Pareles は書く (Pareles, 2016, October 13)。このように互いに矛盾する要素をあわせて取り込みながら、一つのまとまった作品を作り上げてしまうところにディランの芸術的手腕を確認することができる。

Pareles によれば、ディランはその活動の初期からハイカルチャーとロウカルチャーの境界線を乗り越えてきた。ディランはその作品の中に、西洋文学だけでなく、ブルーズやニュースの言葉を取り込んできた。シェイクスピア、ウディー・ガスリー、ロバート・ジョンソン、アルチュール・ランボー、聖書、ビート文学者たち、そして無名のフォーク・シンガーたちの言葉を自分の作品に自在に織り交ぜるディランを Pareles は「ポストモダンの先駆者 (postmodern pioneer)」,あるいは「一人インターネット (one-man internet)」と呼ぶ (Pareles, 2016, October 13; see Baker & Jane, 2016; Belsey, 2002; Butler, 2002; バフチン, 1995)。

さらに Pareles は、ディランの表現活動が「口承の伝統 (oral tradition)」を受け継ぐものであることに注意を促す (Pareles, 2016, October 13; see Ong, 1982)。Pareles によれば、ディランの言葉は歌われるために書かれている。それは、息遣い、リズム、音の高低や強弱と密接に絡み合っている。「ネヴァー・エンディング・ツアー」において、ディランはステージごとに歌唱と演奏を変化させる。その度にディランの言葉は新しい意味を獲得する。そうすることで、ディランは「まるで自分がそれを一度も手にしたことがないかのように、名声を取り戻し続けている (constantly recharging his reputation, as if he hadn't already earned it all)」ようだと Pareles は書く (Pareles, 2016, October 13)。

最後に Pareles は、ディランの歌詞がいかに文学的であるかを以下のように強調して記事を結ぶ。

Mr. Dylan's place in literature — the way he drew his very individual, paradigm-shifting radicalism from folk music's memory, its imaginative preservation of tradition — was clear long before the literary establishment deigned to recognize him. The Nobel doesn't have to certify Mr. Dylan; half a century of literature and songwriting have heard him and responded. Long before the prizes started rolling in, he had already rewired our minds. Still, better late than never. (Pareles, 2016, October 13)

Pareles によれば、ディランはフォーク・ミュージックの伝統を踏まえつつ、それを極めて独特かつラディカルな仕方でも再構築してきた。そしてその事実は、スウェーデン・アカデミーがディランを認めるよりもずっと前から、作家や音楽家たちに認識されてきた。そのように書く Pareles は、今回のディランのノーベル文学賞受賞を「遅かったけれども、ないよりはまし (better late than never)」と歓迎して記事を終えている。

以上で確認したように、Garner と Pareles による批評記事は、ディランの表現活動の独創性と文学性を称えつつ、今回のディランによるノーベル文学賞受賞を支持する主張を展開している。これらの記事は、ディランの言葉が文字として読まれるよりも音として聴かれたときに強い力を放つということ、すなわちディランの表現活動が口承の伝統を体現していることを強調している。また、ディランの作品が矛盾や対立を内包する両義的なものであること、そしてハイカルチャーとロウカルチャーの境界線を乗り越えるようなものであることを確認している。

4-4. ニューヨークに根差した記事

Joseph Berger による記事は、ディランとニューヨークの関わりの深さを記述することに焦点を絞っている (Berger, 2016, October 14)。Berger によれば、若き日のディランはグリニッジ・ヴィレッジのコーヒーハウスに出入りするフォーク・シンガーとして、世間の注目を集めるようになった。ミネソタ州から移住した後、ディランが最初に借りたアパートはマンハッタン南部の

ウェスト・フォース・ストリート 161 番地 (161 West Fourth Street) にあった。1963 年の楽曲「Don't Think Twice, It's All Right」の歌詞に「夜明けにおんどりが鳴くとき、窓の外を見てごらん、僕はいなくなっているよ (When your rooster crows at the break of dawn, Look out your window and I'll be gone)」という一節があるが、このおんどりは当時トンプソン・ストリート (Thompson Street) とブリーカー・ストリート (Bleecker Street) の交差点にあった鶏肉屋のおんどりだったという。これはスーズ・ロトロ (Suze Rotolo) がその回顧録に書いていることだが、ロトロはディランの当時の恋人で、彼女がディランと腕を組みながら歩いている写真は、1963 年のアルバム *The Freewheelin' Bob Dylan* のジャケットに使われている (Berger, 2016, October 14)。

Berger は、ディランとニューヨークの関係を「複雑ではあるが、非常に豊饒なロマンス (complicated, but extraordinary fertile romance)」と表現する (Berger, 2016, October 14)。Berger によれば、ディランは 1960 年代から 1970 年代にかけてのもっとも生産的な時期をニューヨークで過ごした。フォーク・シンガー、ジョーン・バエズ (Joan Baez) と公私ともに深い関係になり、コロンビア・レコードとの契約を手にし、のちに子どもたちのうちの数人を育てたのもニューヨークだった。

ディランがミネソタからニューヨーク・シティーに移り住んだ 1961 年頃のグリニッジ・ヴィレッジは、フォーク・ミュージックの中心地だったと Berger は書く。ディランは初めてグリニッジ・ヴィレッジを訪れた日、Cafe Wha? で演奏し、その後、Gerde's Folk City や Gaslight Cafe へと活動の場を広げていった。1961 年 9 月、Gerde's Folk City でディランの演奏を目にしたニューヨーク・タイムズの音楽評論家 Robert Shelton は、これを絶賛し、その評価がディランのコロンビア・レコードとの契約につながったという (Berger, 2016, October 14)。

Berger は、スーズ・ロトロがディランに与えた影響についても多くを記している。Berger によれば、ウェスト・フォース・ストリートのアパートで一

緒に暮らし始めたディランとロトロは、マンハッタン南部を徘徊し、他のミュージシャンや芸術家たちと交流した。イタリア系共産党員の両親のもと、クイーンズで育ったロトロは、左派的な政治思想を持っており、ディランは彼女から社会問題について学んだ。ディランはロトロに連れられて美術館や小劇場を訪れ、そこで目にした絵画や劇から刺激を受けた (Berger, 2016, October 14)。

このように Berger の記事は、ディランとニューヨークの関わりの深さを具体例とともに記述していく。そこには、ニューヨークが若き日のディランに演奏と成功の機会を与え、そこで出会った人びとがディランの感性を刺激していく様子が描かれている。また、ディランの音楽と文学がニューヨークという創作の土壌によって育まれたことが記されている。

5. まとめと考察

ニューヨーク・タイムズに掲載された記事には、ディランのノーベル文学賞受賞を一般的に伝える記事、受賞に対するニューヨーク・タイムズとしての立場を表明する社説、文学批評家や音楽批評家が受賞についての自分の意見を述べる批評記事、そしてディランとニューヨークの関わりを紹介した地域色の強い記事が含まれていた。これらの記事にはいくつかの特徴がある。

まず、全体的な傾向として、ニューヨーク・タイムズの記事はディランのノーベル文学賞受賞に好意的だと言える。社説は、ディランのノーベル賞受賞を「ありがたい安らぎ (a blessed relief)」と表現し、地元が生んだノーベル賞受賞者としてディランを称えた (The Editorial Board, 2016, October 13)。文学批評家の Dwight Garner は、ディランをウォルト・ウィットマンやエミリー・ディキンソンに匹敵する作家と評価し、音楽批評家の Jon Pareles は、ディランの芸術性の高さはスウェーデン・アカデミーが認めるずっと前から作家や音楽家たちに認識されてきたと述べた (Garner, 2016, October 13;

Pareles, 2016, October 13)。ディランの作風とニューヨーク・タイムズのリベラルな気風に共通点があることを踏まえると、ニューヨーク・タイムズがディランの受賞を称賛するのは自然なことかもしれない。

これに関連して、ニューヨーク・タイムズの記事は、ディランとニューヨークの関わりの深さについて述べている。1960年代にディランが本格的な音楽活動を展開し、ミュージシャンとしての名声を獲得していく拠点となったのがニューヨークだった。ディランは、ニューヨークでの経験と交流をとおして、自らの芸術性と表現力を高めていった。現在まで聴き継がれている *The Freewheelin' Bob Dylan* (1963), *The Times They Are a-Changin'* (1964), *Bringing It All Back Home* (1965), *Highway 61 Revisited* (1965), *Blonde on Blonde* (1966) などのディランの代表作には、グリニッジ・ヴィレッジを中心とする当時のニューヨークの雰囲気の色濃く反映されている。Joseph Berger による記事は、ニューヨークでの経験がディランの創作活動といかに密接に結びついていたかを詳しく記述している (Berger, 2016, October 14)。

いくつかの記事は、ディランの表現活動がハイカルチャーとロウカルチャーの間の溝を埋めるものであることを強調している (Pareles, 2016, October 13; Sisario, Alter, & Chan, 2016, October 13; see Barker & Jane, 2016)。ディランはその作品の中に、シェイクスピアや聖書からの引用と同時に、フォークやブルーズの歌詞を自在に織り交ぜる。ディランの楽曲においては、純文学の言葉とポピュラーミュージックの言葉が違和感なく併存している。そして、そのような表現活動にノーベル文学賞を授与することによって、スウェーデン・アカデミーは文学の境界線を引き直しているとニューヨーク・タイムズの記事は述べている (Sisario, Alter, & Chan, 2016, October 13)。

ディランの作品は、ハイカルチャーとロウカルチャーの間の溝を埋めていくだけでなく、さまざまな二項対立や矛盾をあわせて抱え込む力を持っていると指摘する記事もある。ディランの作品には、難解な面もあれば、平易な面もある。感傷的な面もあれば、非情な面もある。革新的かつ前衛的な面もあ

れば、保守的かつ伝統的な面もある。社会的不正に対する憤りを率直に表現したかと思えば、個人的な物語を繊細に語る。ディランの作品が持つこのような両義性を音楽批評家 Jon Pareles は「ポストモダン (postmodern)」という言葉で表現した (Pareles, 2016, October 13)。ディランの作品を象徴する両義性、雑種性、あるいは多声性は、ある意味では、確かに「ポストモダン」と呼び得るものかもしれない (Barker & Jane, 2016; Belsey, 2002; Butler, 2002; バフチン, 1995)。その一方で、ディランの作品には、その「ポストモダン」というレッテルさえも直ちに拒絶してしまう捉えどころのなさがあるのも事実である。あるいは、あらゆる決めつけに対して否を突き付け続けるところが、ディランの創作の特徴だと言えるかもしれない (花木, 2007)。

最後に、ニューヨーク・タイムズの記事は、ディランの作品が口承文学の伝統を継承していることを強調している (Garner, 2016, October, 13; Pareles, 2016, October 13; Sisario, Alter, & Chan, 2016, October 13)。ディランの歌詞は、紙の上で文字として読まれるためではなく、演奏を伴った歌として聴かれるために書かれている。それは、息遣い、リズム、音の高低と強弱、さらには場の雰囲気や聴衆との関係性によって、その意味を変容させる。文学とは紙に書かれた文字の形で提示されるものであるという理解は、近代以降の西洋社会において標準的なものとされてきた (Ong, 1982)。その一方で、口承文学にはホメロスやサッフォーのような古代ギリシャの詩人たちにまでさかのぼる長い伝統がある。ニューヨーク・タイムズの記事は、ディランがこうした口承文学の伝統を継承していることを確認すると同時に、ディランにノーベル賞を授与することによって、スウェーデン・アカデミーが「文字」に偏り過ぎた文学の定義を「声」の方向に引き戻そうとしていると示唆している。

6. おわりに

この論文では、アメリカ合衆国のミュージシャン、ボブ・ディランのノー

ベル文学賞受賞に対して、ニューヨーク・タイムズがどのように反応したのかを吟味した。その際、社会的現実がコミュニケーションによって創られるという考え方を前提とした（Berger & Luckmann, 1967; Gergen, 2015; Leeds-Hurwitz, 2009）。すなわち、ニューヨーク・タイムズというマスメディアが、ディランによるノーベル文学賞受賞にどのような意味を付与し、どのようなボブ・ディラン像を描き出したのかに注目した。

ディランがアメリカ合衆国を代表するポピュラー・ミュージシャンであるということは、多くのアメリカ人たちが認めている。ディランがメディアの注目を集めるようになった1960年代以降、ディランをめぐる言説はアメリカ合衆国において大量に生産されてきた。そのような文脈の上に、今回のディランによるノーベル文学賞受賞の知らせがもたらされた。そして、ニューヨーク・タイムズはそれに反応した。

日本の新聞は、ディランのことをほとんど知らない読者がいることを想定してディランについての基礎的な情報を伝えたが、ニューヨーク・タイムズには、そのようにする必要はなかった。その代わりにニューヨーク・タイムズは、ミュージシャンがノーベル文学賞を受賞することの意味について多くを記述した。また、ディランによるノーベル文学賞受賞を支持する立場から意見を表明した。その一方で、ニューヨーク・タイムズは、現代のアメリカ人たちに必ずしも知られていないかもしれないディランとニューヨークの関わりについて紹介した。特に1960年代、ディランがニューヨーク・シティーを拠点に音楽活動を本格化させていく様子について詳しく述べた。

一般的に言って、ニューヨーク・タイムズの記事は、ディランのノーベル文学賞受賞を支持する傾向にあった。ニューヨークがディランの重要な活動拠点だったこと、ディランの作品に1960年代のマンハッタン南部の自由でリベラルな雰囲気が色濃く反映されていることを踏まえれば、それは自然なことだったと思われる。ニューヨーク・タイムズがディランによるノーベル文学賞受賞に与えた意味、およびニューヨーク・タイムズが描き出したボブ・ディ

ラン像には、一定の説得力があるだろう。その一方で、それらは絶対的なものでも、普遍的なものでもない。他のメディアはディランによるノーベル文学賞受賞に別の意味を付与し、ニューヨーク・タイムズとは異なるボブ・ディラン像を描き出しただろう。それらを吟味する作業は、今後の研究に委ねたい。

引用文献

- Barker, C., & Jane, E. A. (2016). *Cultural studies: Theory and practice* (5th ed.). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Belsey, C. (2002). *Poststructuralism: A very short introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Berger, J. (2016, October 14). Bob Dylan and New York: A complicated, fertile romance. *The New York Times*.
- Berger, P. L., & Luckmann, T. (1967). *The social construction of reality: A treatise in the sociology of knowledge*. Garden City, NY: Doubleday.
- Butler, C. (2002). *Postmodernism: A very short introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Dansby, A. (2001, March 26). Dylan wins Oscar: Things Have Changed takes Academy Award for Best Original Song. *Rolling Stone*.
- Dylan, B. (1963). *The freenbeelin' Bob Dylan*. New York: Columbia Records.
- Dylan, B. (1964). *The times they are a-changin'*. New York: Columbia Records.
- Dylan, B. (1965). *Bringing it all back home*. New York: Columbia Records.
- Dylan, B. (1965). *Highway 61 revisited*. New York: Columbia Records.
- Dylan, B. (1966). *Blonde on blonde*. New York: Columbia Records.
- Garner, D. (2016, October 13). Bob Dylan, the Writer: An Authentic American Voice. *The New York Times*.
- Gergen, K. J. (2015). *An invitation to social construction* (3rd ed.). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Golden Globe Awards. (n.d.). Hollywood Foreign Press Association. Retrieved from <https://www.goldenglobes.com/person/bob-dylan>
- Grammy.com. (2018). Recording Academy. Retrieved from <https://www.grammy.com/grammys/artists/bob-dylan>
- Leeds-Hurwitz, W. (2009). Social construction of reality. In S. W. Littlejohn, & K. A. Foss (Eds.), *Encyclopedia of communication theory*. (pp. 891-894). Thousand Oaks, CA: Sage.

- Ong, W. J. (1982). *Orality and literacy*. New York, NY: Routledge.
- Pareles, J. (2016, October 13). Bob Dylan, the Musician: America's great one-man songbook. *The New York Times*.
- Pulitzer Prizes. (2018). The New York Times Company. Retrieved from <https://www.nytc.com/pulitzer-prizes/>
- Rock & Roll Hall of Fame. (n.d.). Retrieved from <https://www.rockhall.com/inductees/bob-dylan>
- Rolling Stone. (2012, May 29). Bob Dylan Awarded Presidential Medal of Freedom. *Rolling Stone*.
- Sisario, B., Alter, A., & Chan, S. (2016, October 13). Bob Dylan wins Nobel Prize, Redefining boundaries of literature. *The New York Times*.
- The Editorial Board. (2016, October 13). How Dylan became Dylan. *The New York Times*.
- The 2008 Pulitzer Prize Winner in Special Awards and Citations. (2018). The Pulitzer Prizes. Retrieved from <http://www.pulitzer.org/winners/bob-dylan>
- 2016 Annual Report. (2017). The New York Times Company.
- 岡部伸 (2016年10月13日)「ノーベル賞、文学賞にボブ・ディラン氏、『新たな詩的表現を創造』、村上氏は受賞逃す」産経ニュース
- 小滝麻理子 (2016年10月13日)「ボブ・ディラン氏にノーベル文学賞、シンガー・ソングライター『詩的表現を創造』」日本経済新聞電子版
- ノーベル賞の記録編集委員会 (2017年)『ノーベル賞117年の記録』山川出版社
- 花木亨 (2007年)「アメリカ社会に内在する他者——ドキュメンタリー映画『ノー・ディレクション・ホーム』に描かれるボブ・ディラン像の一解釈」、『時事英語学研究』第46号, pp. 49-62.
- バフチン, ミハイル (1995年)『ドストエフスキーの詩学』ちくま学芸文庫
- 広瀬登 (2016年10月13日)「ノーベル文学賞、ボブ・ディランさんに、歌手で初」毎日新聞電子版
- 「ボブ・ディランさんにノーベル文学賞、音楽家・作詞家」(2016年10月13日)朝日新聞デジタル